

牛海綿状脳症(BSE)対策の見直しに関する一般向け説明会概要

1. 開催の概要

東京会場：平成 25 年 1 月 22 日（火）13:30-16:00

財団法人全電通労働会館（東京都千代田区神田駿河台 3 丁目 6）

参加者数：217名

大阪会場：平成 25 年 1 月 24 日（木）13:30-16:00

大阪市立男女共同参画センター東部館（大阪府大阪市城東区鳴野西 2-1-21）

参加者数：119 名

主催：内閣府食品安全委員会、厚生労働省、消費者庁

2. 内容

- ・説明 「BSE対策の見直しに係る食品健康影響評価について」 食品安全委員会
「BSE対策の見直しについて」 厚生労働省
- ・質疑応答 食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省

3. 質疑応答の概要

<非定型BSEについて>

- 非定型のBSEには不明な点が多く、予防的な観点から対策をとるべき。検査などの対策を継続すべきではないか。

（回答）

非定型のBSEについては、日本での1例を除けば、6.3歳以上の牛で確認されており、通常老齢牛で発生するものです。そのため、規制対象を30か月齢に引き上げてもリスクの低さはほとんど変わりません。

なお、国内で発生した23か月齢での例についても、感受性の高いマウスを使った感染実験を行った結果、伝達性のものではなかったことがわかっており、牛-ヒト間はもとより牛-牛間での感染性もないと考えられます。

<全頭検査について>

- 全頭検査をしているのは世界でも日本だけ。全世界的にリスクは十分に下がったのだから、費用を他の事業に振り分けるべき。安価な輸入牛肉の輸入もできるようにして、国民の選択肢を広げてほしい。

<米国での飼料管理について>

- 米国で飼料規制が強化されたのは2009年であり、その後まだ十分な時間が経っていないのではないか。
- 飼料規制は工場内で適切に分別されていても、飼育段階で、牛と豚の飼料が入れ替わ

ったりしているのではないか。米国内では、規制がきちんと遵守されているのか。

(回答)

米国での飼料規制は 2009 年以前から行われていましたが、2009 年に、飼料規制を、牛だけでなくすべての動物種間に広げる追加措置が講じられました。

米国では基本的に牛と豚・鶏の配合飼料工場は別であり、同一の工場で作る場合にも、両者が混ざらない対策が実施されています。

米国での遵守状況については、米国食品医薬品局（FDA）からの情報のほか、現地調査を行うなどの確認を実施しています。

<米国でのサーベイランス>

- 米国での BSE の検査は、健康牛を対象にしていないなど、ごく一部しか行われておらず、不十分なのではないか。

(回答)

サーベイランスは、健康牛を対象に行っても効果的でなく、リスクの高い牛を検査することに意味があります。米国でのサーベイランスは、国際獣疫事務局（OIE）でのルールより高い頻度で実施されています。

BSE 対策においては、検査をすること以上に、特定危険部位（SRM）の除去と BSE 罹患した家畜を減らすこと、そのための飼料規制が重要です。全世界的に見ても発生事例は相当下がっており、飼料規制の成果が確実に出ています。

<月齢確認について>

- 日本はトレーサビリティシステムが確立しているが、米国では歯列管理しかしていないため、不安である。また、30 か月という基準は、個体差を考慮しているのか。

(回答)

歯列での月齢確認は、以前は欧州でも採用されており、国際的に妥当と認められた方法です。個体差のばらつきを考慮しても、30 か月齢以上である可能性のある牛を分別することができます。

なお、米国では飼育時に年齢で管理がなされていますが、経済動物である牛を長く肥育することはまれで、通常 2 歳までにと畜されます。

<その他>

- 新たに食用可能になった部位について、肥料や飼料への使用は認められるのか。
- 輸入時の検査体制や違反があった場合の対応はどうなっているのか。
- 見直しの対象となっている 4 か国以外からのせき柱などの輸入自粛については今後どうなっていくのか。

牛海綿状脳症（BSE）対策の見直しについて



■ 概要

- これまでの対策
- 再評価の実施の経緯

- 食品健康影響評価を踏まえた対応（案）
 - ・ 国内措置
 - ・ 輸入措置

- 今後の予定



これまでの対策








■ BSE対策の経緯

	国内			輸入	
	検査対象	SRM 除去	その他の動き	米国・カナダ	ヨーロッパ
H 8. 3 H12. 12					英国産：禁止 EU産：禁止
H13. 9	国内で1頭目のBSE感染牛確認				
H13. 10	全頭検査	<ul style="list-style-type: none"> ・除去・焼却義務づけ -頭部 (舌・頬肉以外) -せき髄 -扁桃 -回腸遠位部 	<ul style="list-style-type: none"> ・肉骨粉飼料完全禁止 ・牛海綿状脳症対策特別措置法の公布 	カナダ産：禁止 米国産：禁止	
H14. 6					
H15. 5 H15. 12					
H16. 2					
H17. 8 H17. 12	21か月齢以上			20か月齢以下 輸入再開 ※H18.1～7 混載事例発生のため 米国産の輸入手続停止	
H21. 4 H21. 5		<ul style="list-style-type: none"> ・ピッシング禁止 ・OIE総会で「管理されたリスクの国」と認定 			



■ 飼料規制

		給与飼料					
		日 本 		米 国 ・ カナダ  		E U (オランダ・フランス)  	
		牛	豚・鶏	牛	豚・鶏	牛	豚・鶏
肉 骨 粉	牛	×	×	×	○	×	×
	SRM (注1)	×	×	×	○→×	×	×
	豚	×	○	○	○	×	×
	鶏	×	○	○	○	×	×

○：使用可、×：使用不可

(注1) 米国では、30か月齢以上の牛の脳及びせき髄

(注2) 米国及びカナダが、1997年に開始した飼料規制においては、牛のSRMの豚・鶏に対する飼料への利用が認められていたが、カナダでは2007年、米国では2009年に禁止された。



再評価の実施の経緯



■ 牛海綿状脳症(BSE)対策の再評価について

- 国内外での飼料規制等の対策の結果、BSEの発生数は大きく減少し、リスクが低減
 - ～世界では、約3万7千頭(1992年、発生のピーク)→29頭(2011年)
 - ～国内では、平成15年(2003年)以降に出生した牛からは、BSE陽性牛は、確認されていない
- OIEにより「管理されたリスクの国」と認定された国々から、国際基準に則した貿易条件への早期の移行について要請



平成13年10月の対策開始から10年が経過したことから、最新の科学的知見に基づき、国内検査体制、輸入条件といった対策全般の再評価を行うこととし、平成23年12月19日、食品安全委員会に諮問した。



■ 食品安全委員会への食品健康影響評価の諮問(平成23年12月19日)

1 国内措置

(1) 検査対象月齢

現行の規制閾値である「20か月齢」から「30か月齢」とした場合のリスクを比較。

(2) SRMの範囲

頭部(扁桃を除く。)、せき髄及びせき柱について、現行の「全月齢」から「30か月齢超」に変更した場合のリスクを比較。

2 国境措置(米国、カナダ、フランス及びオランダ)

(1) 月齢制限

現行の規制閾値である「20か月齢」から「30か月齢」とした場合のリスクを比較。

(2) SRMの範囲

頭部(扁桃を除く。)、せき髄及びせき柱について、現行の「全月齢」から「30か月齢超」に変更した場合のリスクを比較。

※ フランス及びオランダについては、現行の「輸入禁止」から「30か月齢」とした場合のリスクを比較。

3 上記1及び2を終えた後、国際的な基準を踏まえ、さらに月齢の規制閾値(上記1(1)及び2(1))を引き上げた場合のリスクを評価。



■ 食品安全委員会からの答申（平成24年10月22日）

【国内措置】 日本

- ・ 検査対象月齢:規制閾値が「20か月齢」の場合と「30か月齢」の場合のリスクの差は、あったとしても非常に小さく、人への健康影響は無視できる。
- ・ SRMの範囲:「全月齢」の場合と「30か月齢超」の場合のリスクの差は、あったとしても非常に小さく、人への健康影響は無視できる。

【国境措置】 米国、カナダ、フランス、オランダ

- ・ 月齢制限:規制閾値が「20か月齢」(フランス・オランダは「輸入禁止」)の場合と「30か月齢」の場合のリスクの差は、あったとしても非常に小さく、人への健康影響は無視できる。
- ・ SRMの範囲:「全月齢」(フランス・オランダは「輸入禁止」)の場合と「30か月齢超」の場合のリスクの差は、あったとしても非常に小さく、人への健康影響は無視できる。

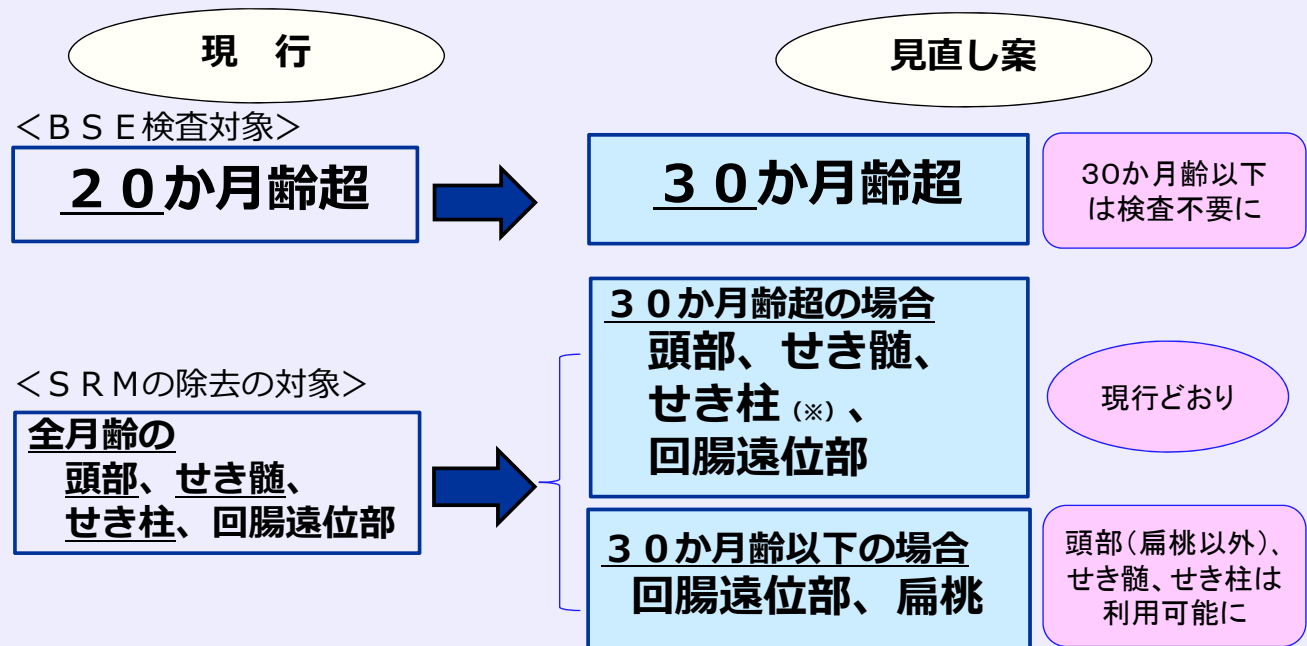


食品健康影響評価を踏まえた対応 (案)

・・・国内措置・・・



■ 国内措置の見直し案 ① ～検査対象・SRMの除去の対象～



- ・ 厚生労働省関係牛海綿状脳症対策特別措置法施行規則及びと畜場法施行規則の改正
- ・ 食品、添加物等の規格基準の改正

※ せき柱中の背根神経節にBSEプリオンが蓄積されるため、せき柱を規制の対象としているが、骨の部分にはリスクはないため、骨の突起部分について規制の対象外となる範囲を拡大する。



■ 国内措置の見直し案 ② ～分別管理～

新たに、30か月齢以下の牛に限って、頭部（扁桃以外）・せき髄・せき柱が利用可能になるため、30か月齢超と、30か月齢以下の牛を分別することが必要



「SRMの管理及びBSE検査に係る分別管理ガイドライン」を通知予定

- BSE検査対象となる牛の分別管理について規定
- 30か月齢以下の頭部（扁桃除く）及びせき髄を食用に供する場合の分別管理や汚染防止規定を追加

など

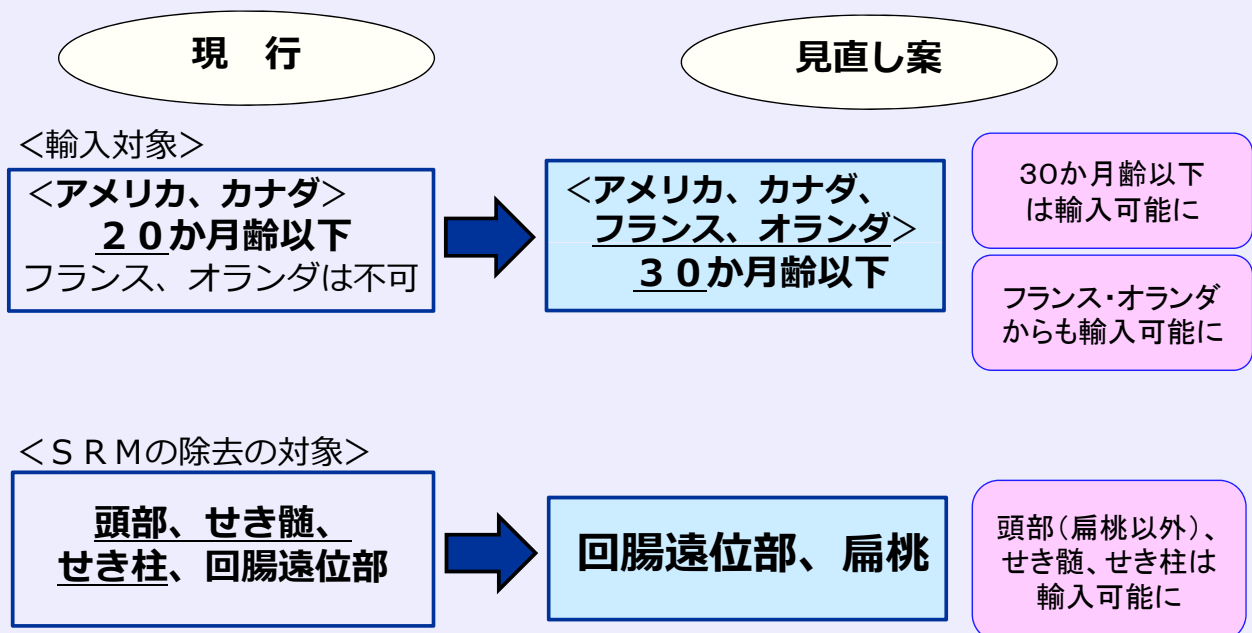


食品健康影響評価を踏まえた対応 (案)

・・・輸入措置・・・



■ 輸入措置の見直し案(輸出国政府との協議前)



・輸出国政府との間で、輸入条件を設定後に、通知を発出予定



■ 輸出国政府との協議状況

輸出国における、SRMの除去や、
30か月齢超・30か月齢以下の牛の区分管理が
重要









- ・輸出国政府との協議と、現地調査を実施
と畜場、食肉処理施設におけるSRM除去、月齢による
区分管理の確認を行った。

※今回輸入の対象となる4カ国では、従前から、月齢30か月を境目にした区
分管理が行われている。

※米国からは、一定期間経過後、米国の遵守状況を踏まえた検疫措置等の
見直し及びBSE対策に関する措置の継続協議の要望を受けている。



■ 各国のBSE検査体制の比較

	日本  改正案	米国 	カナダ 	フランス 	オランダ 	OIE基準 
食肉検査	30か月齢超	-	-	72ヶ月齢超 ^(注3)		- ^(注4)
発生状況 調査 ^(注1) (高リスク牛 ^(注2))	24か月齢以上の 死亡牛等	30か月齢以上の 高リスク牛 の一部	30か月齢超の 高リスク牛 の一部	48か月齢超の 高リスク牛		30か月齢以上の 高リスク牛 の一部

(注1) BSEの発生状況やその推移などを継続的に調査・監視すること

(注2) 中枢神経症状牛、死亡牛、歩行困難牛などのこと

(注3) 欧州委員会は、本年2月下旬～3月上旬以降、加盟国（ブルガリア及びブルーマニアを除く）
の判断により健康牛のBSE検査を廃止することが可能としている。

(注4) OIE基準では、BSEスクリーニング検査の実施を求めている。



■ 各国の国内における特定危険部位(SRM)の範囲の比較

	日本  改正案	米国 	カナダ 	フランス 	オランダ 	OIE基  (管理されたリスク国)
頭部	30か月齢超の頭部 舌・頬肉を除く	30か月齢超の頭蓋(注)	30か月齢超の頭蓋	12か月齢超の頭蓋	30か月齢超の頭蓋	
扁桃	全月齢	全月齢	30か月齢超	全月齢	全月齢	
せき髄	30か月齢超	30か月齢超	30か月齢超	12か月齢超	30か月齢超	
せき柱 背根神経節を含む	30か月齢超	30か月齢超	30か月齢超	30か月齢超	30か月齢超	
腸	全月齢の回腸遠位部	全月齢の回腸遠位部	全月齢の回腸遠位部	全月齢の腸	全月齢の回腸遠位部	

(注) 頭部の骨格、脳、眼などを含む部位のこと



■ 各国の対日輸出条件案

		米国 	カナダ 	フランス 	オランダ 
輸入対象		30か月齢以下の牛肉及び内臓			12か月齢以下の牛肉及び内臓
SRMの除去の対象	扁桃	全月齢			全月齢
	腸	全月齢の回腸遠位部			全月齢の回腸遠位部



今後の予定



■ 今後の予定

- | | |
|--------|---|
| 2月 1 日 | 国内措置見直しの省令改正(検査対象30か月齢超、SRM見直し)、
せき柱に係る告示改正・施行、
輸入条件見直しの通知改正・施行 |
| 4月 1 日 | 国内措置見直しの省令施行 |

※国産牛の検査費用の補助(21か月齢以上)については、本年4月の段階では継続することとし、食品安全委員会の2次答申の際に見直し。



参考資料



■牛海綿状脳症(BSE:Bovine Spongiform Encephalopathy)

1. 原因 (病原体)

異常プリオンたん白質 (たん白質の一種)

2. 感受性動物

牛、水牛

3. 症状

長い潜伏期間 (3~7年程度) の後、行動異常、運動失調などの神経症状を呈し発病後2週間から6ヶ月の経過で死に至る。脳の組織にスポンジ状の変化を起こす。治療法はない。

4. 診断法

脳から異常プリオンたん白質を検出することにより診断。生前診断法はない。

5. 感染経路

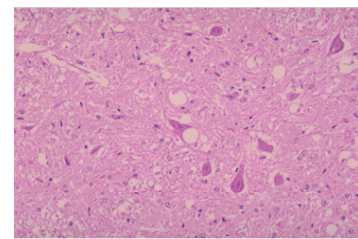
BSE感染牛を原料とした肉骨粉^(注)を飼料として牛に給与することにより、感染が拡大。
→ BSE発生防止には飼料規制が重要。

(注) 肉骨粉とは、食肉処理の過程で得られる肉、皮、骨等の残さから製造される飼料原料。
BSE感染牛の特定危険部位が混入する可能性あり。

6. ヒトへの感染

変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)は、BSEの異常プリオンたん白質の摂取が原因と考えられている。平成24年(2012年)10月までに、vCJD患者数は世界全体で227人(うち英国176人(輸血による感染例3人を含む。))。

Photo: BSE罹患牛の延髄 (脳の一部)



(x200)

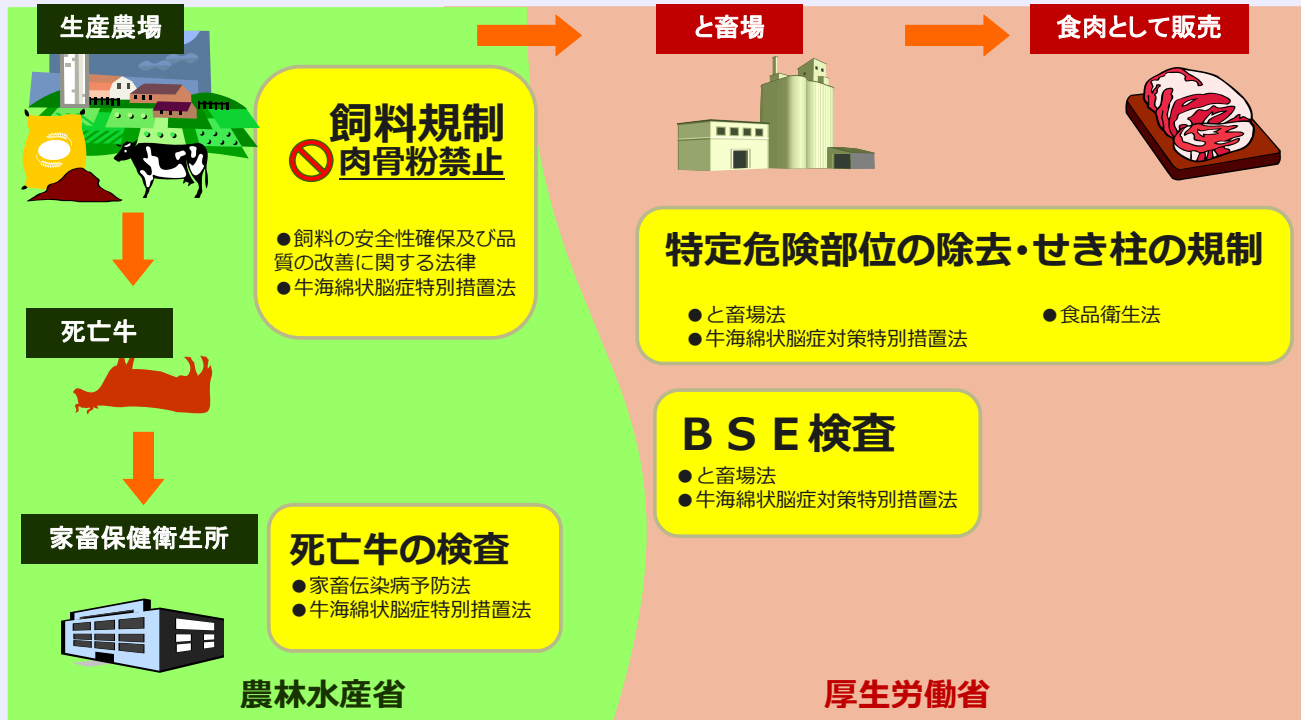
神経細胞及び周囲の神経網に空胞が見られる。

〔出典：独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究所HP〕



■ 国産牛のBSE対策の概要

●飼料規制などの生産段階からと畜、販売の各段階における規制により、食肉の安全性を確保



<トレーサビリティ（農林水産省所管トレーサビリティ法）（注）>

（注）個体識別番号により、その牛が、いつどこで生まれ、飼育され、と畜されたかなどが確認できる。



Ministry of Health, Labour and Welfare

23

■ 国産牛のBSE対策の経緯

<p>平成13年 (2001)</p> <ul style="list-style-type: none"> 9月10日 10月4日 10月18日～ 	<p>国内において1頭目のBSE感染牛確認（農） 肉骨粉飼料完全禁止（農） と畜場においてと畜解体される牛の全頭検査（厚） 特定部位（全月齢の頭部（舌及び頬肉を除く。）、脊髄、扁桃及び回腸遠位部）の除去、焼却の義務づけ（厚）</p>
<p>平成14年 (2002)</p> <ul style="list-style-type: none"> 6月14日 	<p>牛海綿状脳症対策特別措置法の公布（厚、農）</p>
<p>平成16年 (2004)</p> <ul style="list-style-type: none"> 2月16日～ 2月 9月9日 	<p>BSE発生国の牛のせき柱（全月齢）の食品への使用禁止（厚） 我が国のBSE対策について、中立的立場から科学的評価・検証を開始（食安委） 我が国のBSE対策の評価・検証結果の中間とりまとめ公表（食安委） ・特定危険部位（SRM）の除去は人のBSE感染リスクを低減するため非常に有効。 ・これまでの国内BSE検査において、20ヶ月齢以下の感染牛が確認されていない。等</p>
<ul style="list-style-type: none"> 10月15日 	<p>全頭検査を含む国内対策の見直しについて、食品安全委員会に諮問（厚、農） ・BSE検査の検査対象月齢を21ヶ月齢以上とすること、SRMの除去の徹底等</p>
<p>平成17年 (2005)</p> <ul style="list-style-type: none"> 5月6日 7月1日 	<p>食品安全委員会から答申（厚、農） 牛海綿状脳症対策特別措置法施行規則の一部を改正する省令の公布（厚） ・検査対象月齢：零月以上→21ヶ月以上</p>
<ul style="list-style-type: none"> 8月1日 	<p>改正省令の施行（厚） ・21ヶ月齢未満の牛について地方自治体が自主検査を行う場合は、3年間の経過措置として国庫補助を継続した上で、平成20年（2008年）7月末に終了した。</p>
<p>平成21年 (2009)</p> <ul style="list-style-type: none"> 4月1日～ 	<p>と畜場法施行規則を改正し、と畜場におけるピッシング^(注)を禁止（厚） (注)と畜の際、牛の脚が動くのを防ぐために、失神させた牛の頭部からワイヤ状の器具を挿入し、せき髄神経組織を破壊すること。 OIE総会で日本のBSEステータスが「管理されたリスクの国」と認定</p>
<p>平成23年 (2011)</p> <ul style="list-style-type: none"> 12月19日 	<p>BSE対策全般の再評価として国内措置及び国境措置について、食品安全委員会に諮問（厚）</p>
<p>平成24年 (2012)</p> <ul style="list-style-type: none"> 10月22日 	<p>食品安全委員会から答申（厚）</p>

※都道府県等の食肉衛生検査体制：81自治体、111機関、と畜検査員2,688人（平成24年（2012年）3月末）



Ministry of Health, Labour and Welfare

24

■ 輸入牛のBSE対策の経緯

<p>平成8年 (1996)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 3月25日 ・ 3月26日 <p>平成12年 (2000)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 12月22日 <p>平成13年 (2001)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2月15日 <p>平成15年 (2003)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 5月21日 ・ 12月24日 <p>平成17年 (2005)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 5月24日 ・ 12月8日 ・ 12月12日 	<p>欧州委員会において、全ての英国産牛肉・牛肉加工品等のEU加盟国への輸出禁止を採択 英国産牛肉・牛肉加工品の輸入中止</p> <p>EU諸国等からの牛肉・牛肉加工品の輸入中止</p> <p>BSE発生国産の牛肉・牛加工品の輸入の法的禁止</p> <p>カナダにおいてBSE感染牛確認、輸入禁止 米国においてBSE感染牛確認、輸入禁止</p> <p>食品安全委員会へ、対日輸出プログラムの遵守を前提とした、我が国の牛肉と米国及びカナダから輸入される牛肉のリスクについての同等性について諮問 食品安全委員会の答申 米国及びカナダ産牛肉の輸入の再開 ・牛肉は20ヶ月齢以下と証明される牛由来 ・特定危険部位(SRM)はあらゆる月齢から除去</p>
<p>(混載事例発生のため、平成18年(2006年)1月20日から7月27日までの間、米国産牛肉等の輸入手続を停止)</p>	
<p>平成19年 (2007)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 5月20日 ・ ~25日 ・ 6月1日 ・ 6月20日 <p>平成23年 (2011)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 12月19日 <p>平成24年 (2012)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 10月22日 	<p>OIE総会(米国及びカナダのBSEステータスが「管理されたリスクの国」と認定)</p> <p>カナダ側から輸入条件見直し協議の要請 米国側から輸入条件見直し協議の要請 【要請の内容】国際基準に則した貿易条件への早期の移行</p> <p>BSE対策全般の再評価として、国内措置及び国境措置について、食品安全委員会に諮問(厚) 食品安全委員会から答申(厚)</p>



■ BSE検査頭数(と畜場)とBSE感染確認頭数

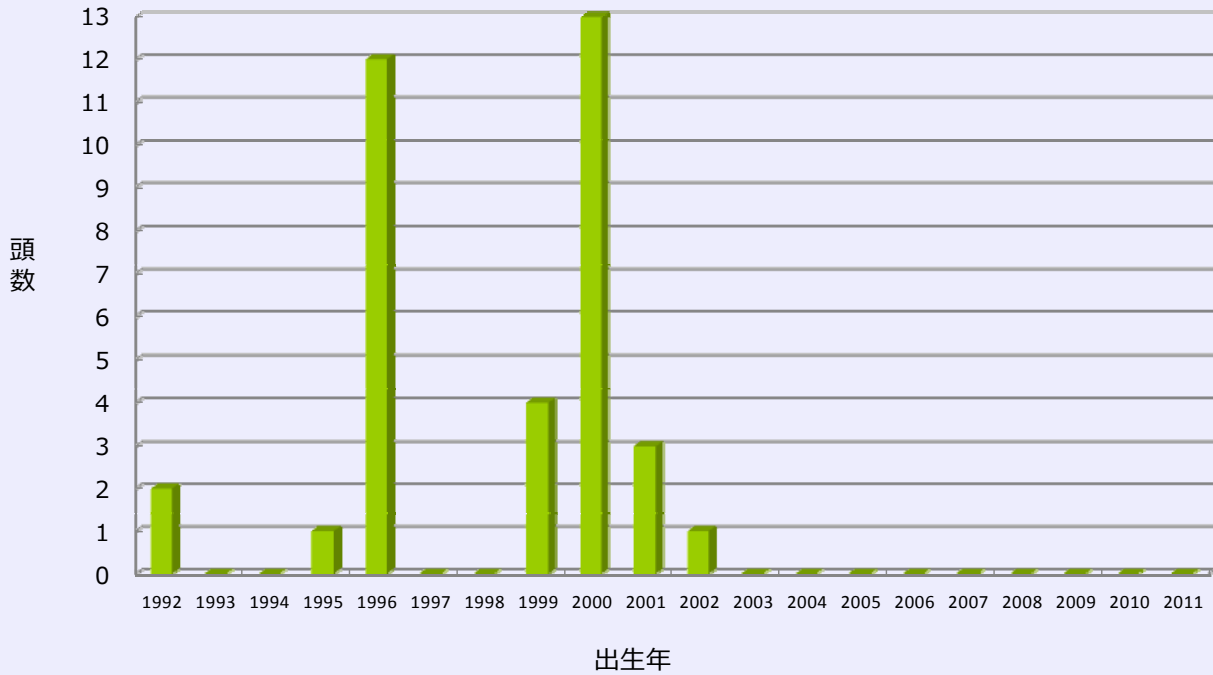
	BSE検査頭数 (と畜場)	BSE確認頭数 ^(注) (平成24年(2012年)10月31日現在)					確認時の月齢
		<21	21-40	41-60	61-80	>80	
平成13年度(2001)	523,591	3(2)			3(2)		
平成14年度(2002)	1,253,811	4(4)			2(2)	2(2)	
平成15年度(2003)	1,252,630	4(3)	2(2)			2(1)	
平成16年度(2004)	1,265,620	5(3)		1	1(1)	3(2)	
平成17年度(2005)	1,232,252	8(5)		2(1)	4(2)	2(2)	
平成18年度(2006)	1,218,285	8(3)			7(2)	1(1)	
平成19年度(2007)	1,228,256	3(1)				3(1)	
平成20年度(2008)	1,241,752	1				1	
平成21年度(2009)	1,232,496	0					
平成22年度(2010)	1,216,519	0					
平成23年度(2011)	1,187,040	0					
平成24年4月~12月(2012)	921,029	0					
合計	13,773,281	36(21)	2(2)	3(1)	17(9)	14(9)	

(注) () はと畜場で確認された頭数。平成13年(2001年)9月に千葉県で確認された1例目、死亡牛検査で確認された14例を含め、国内ではこれまでに36頭がBSE感染牛として確認
(注) 平成21年度(2009年度)以降は、BSE感染牛は確認されていない。



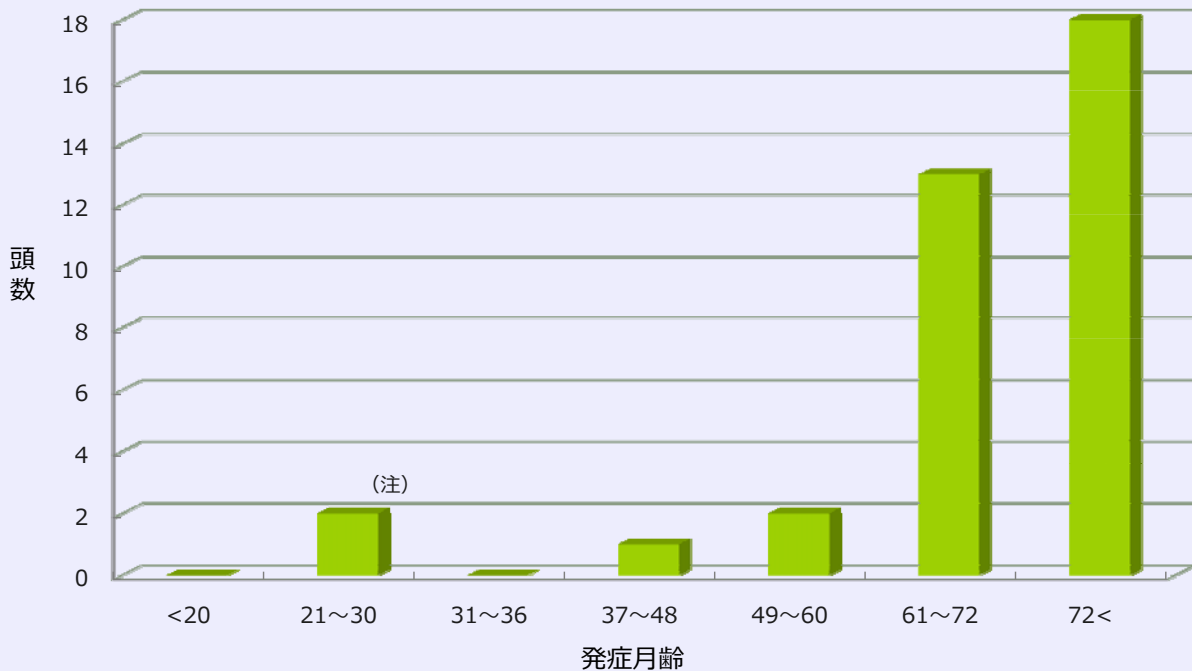
国内のBSE検査陽性牛の出生年分布

- 飼料規制等の国内対策の結果、平成15年（2003年）以降に出生した牛からはBSE陽性牛は、確認されていない。



国内のBSE検査陽性牛の発症月齢分布

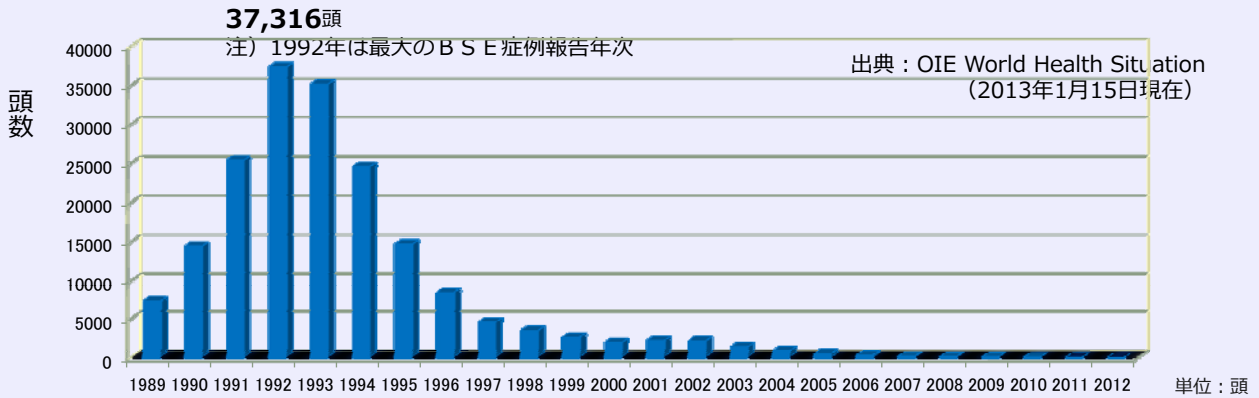
- 一般的に、BSEは、高月齢で発症する。



(注) 30ヶ月齢以下で感染が確認された2頭については、高い感度を示すマウスを用いた感染実験において感染性は確認できなかった。
(厚生労働科学研究食品の安心・安全確保推進研究事業「食品を介するBSEリスクの解明等に関する研究」)



世界のBSE発生件数の推移



	1992	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	累計
全体	37,316	2,215	2,179	1,389	878	561	329	179	125	70	45	29	12	190,634
欧州全体 (英国除く)	36	1,010	1,032	772	529	327	199	106	83	56	33	21	9	5,954
(フランス)	(0)	(274)	(239)	(137)	(54)	(31)	(8)	(9)	(8)	(10)	(5)	(3)	(1)	(1,021)
(オランダ)	(0)	(20)	(24)	(19)	(6)	(3)	(2)	(2)	(1)	(0)	(2)	(1)	(0)	(88)
(デンマーク)	(2)	(6)	(3)	(2)	(1)	(1)	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)	(0)	(0)	(16)
英国	37,280	1,202	1,144	611	343	225	114	67	37	12	11	7	1	184,619
アメリカ	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	3
カナダ	0	0	0	2 ^(注1)	1	1	5	3	4	1	1	1	0	20 ^(注2)
日本	0	3	2	4	5	7	10	3	1	1	0	0	0	36
イスラエル	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ブラジル	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1

(注1) うち1頭はアメリカで確認されたもの。

(注2) カナダの累計数は、輸入牛による発生1頭、米国での最初の確認事例(2003年12月)1頭を含む。



世界のBSE発生頭数及びvCJD患者数

世界のBSE発生頭数及びvCJD患者数 (BSE:頭、vCJD:人)

	国名	BSE	vCJD
(1)	英国	184,619	176 ^{*2}
(2)	アイルランド	1,652	4 ^{*3}
(3)	ポルトガル	1,080	2
(4)	フランス	1,020	27 ^{*4}
(5)	スペイン	779	5
(6)	スイス	467	—
(7)	ドイツ	419	—
(8)	イタリア	144	2
(9)	ベルギー	133	—
(10)	オランダ	88	3
(11)	ポーランド	73	—
(12)	日本	36	1 ^{*5}
(13)	チェコ	30	—
(14)	スロバキア	25	—
(15)	デンマーク	16	—
(16)	カナダ	20	2 ^{*5}
(17)	スロベニア	8	—
(18)	オーストリア	8	—
(19)	ルクセンブルグ	3	—
(19)	アメリカ	3 ^{*1}	3 ^{*6}
(21)	リヒテンシュタイン	2	—
(22)	フィンランド	1	—
(22)	ギリシャ	1	—
(22)	イスラエル	1	—
(22)	スウェーデン	1	—
	サウジアラビア		1
	台湾		1

◆ 飼料規制等のBSE対策の結果、各国のBSE発生頭数は近年、急激に減少(約3万7千頭(1992年、発生のピーク)→29頭(2011年))。

(出典)

- BSE発生頭数については、OIE(国際獣疫事務局)(2012年6月30日時点、なお英国のデータは2012年7月6日時点)、日本については2012年8月時点。
- vCJD患者数については、英国保健省(2012年8月時点)等(日本のデータは2012年7月時点)
- なお、表中の“—”は、vCJDの報告がないことを示す。

※1 OIEの統計によると、2003年12月に報告された米国での発生例はカナダから輸入された牛であるため、カナダの発生頭数にカウントされている。

※2 うち3名は輸血による感染例

※3 うち1名は英国滞在歴のある患者。

※4 うち1名は英国に定期的に滞在。

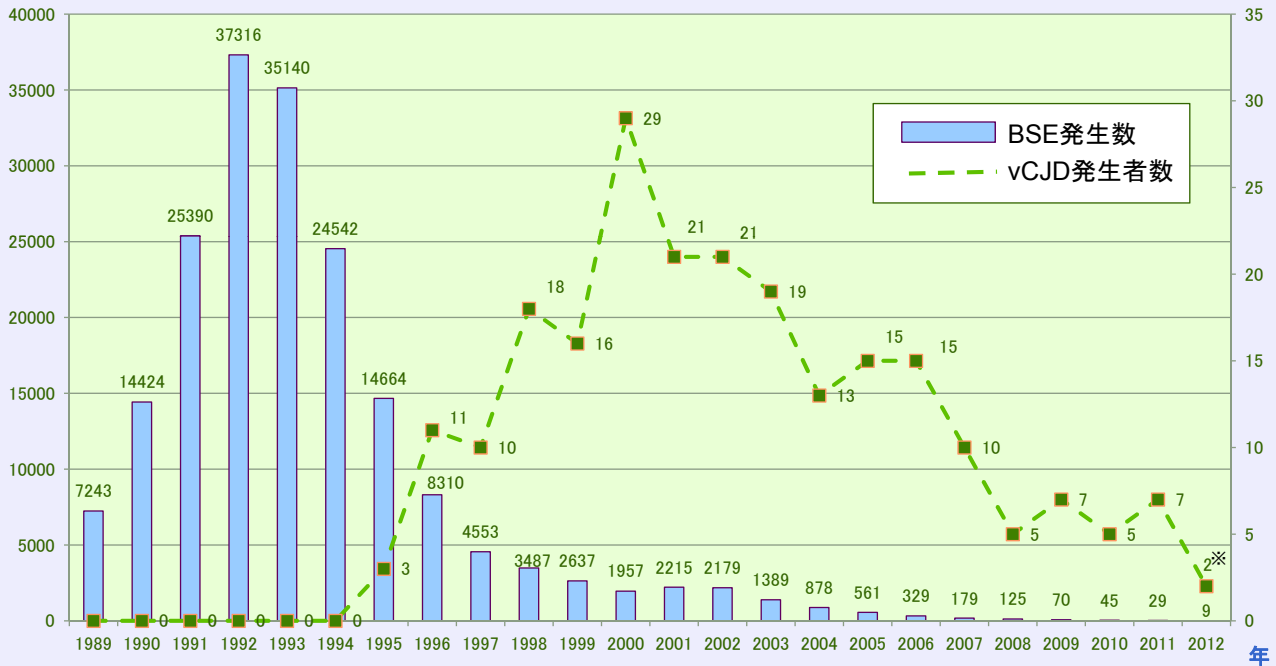
※5 英国滞在歴のある患者。

※6 うち2名は在米英国人、1例は在米サウジアラビア人。



世界のBSE発生頭数及びvCJD発生者数

頭数



サーベイランスは1990年5月から開始
 ※2012年6月28日時点で生存している

資料: OIE” Number of reported cases of bovine spongiform encephalopathy (BSE) in farmed cattle worldwide: 2012/11/8
 vCJD数 vCJD cases Worldwide (EUROcJD): 2012/6/28



OIE(国際獣疫事務局)におけるBSEステータスの分類と貿易条件

ステータス	貿易条件
無視できるリスクの国 (注1) オーストラリア、ニュージーランド、デンマーク等19ヶ国	① とさつ前後検査に合格 ② 飼料規制が施行された日以降に出生した牛由来であること
管理されたリスクの国 日本(注2)、米国、カナダ、フランス、オランダ等30ヶ国	① とさつ前後検査に合格 ② ピッシング等が行われていないこと ③ 特定危険部位(SRM)が除去されていること SRMの範囲: 全月齢の扁桃・回腸遠位部、30ヶ月齢超の脳・眼・せき髄・頭蓋骨・せき柱
不明のリスクの国	① とさつ前後検査に合格 ② ピッシング等が行われていないこと ③ 特定危険部位(SRM)が除去されていること SRMの範囲: 全月齢の扁桃・回腸遠位部、12ヶ月齢超の脳・眼・せき髄・頭蓋骨・せき柱

(注1) 「無視できるリスクの国」の要件は、最も遅く産まれたBSE牛の生後11年が経過していること等
 (注2) 平成25年(2013年)2月、日本は「無視できるリスクの国」の要件を満たす見通し

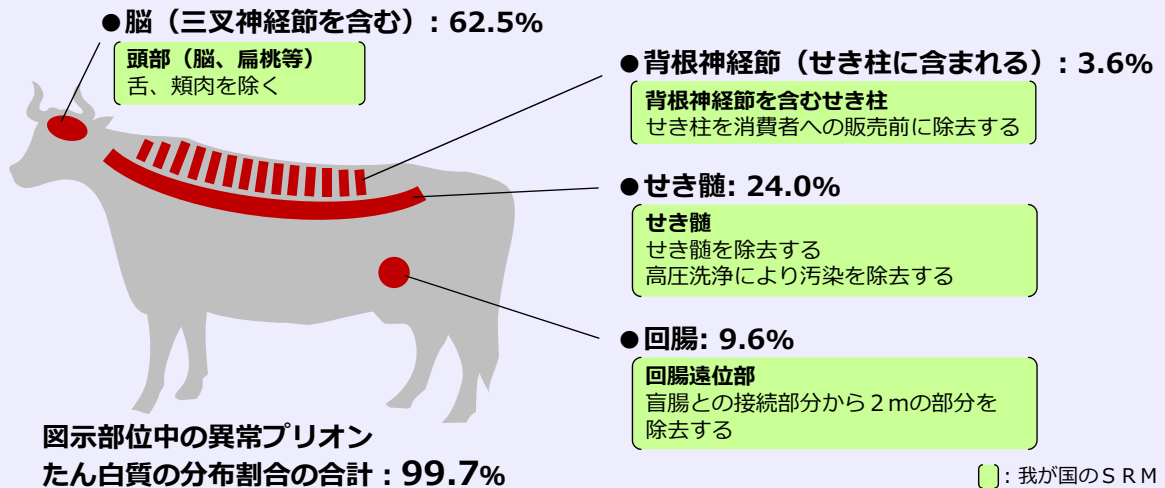


■ 特定危険部位(SRM:Specified Risk Material)

- 異常プリオンたん白質は、脳、せき髄、小腸などに蓄積し、これらの器官は特定危険部位（SRM）と呼ばれる。
- SRMの除去は、ヒトがvCJDに感染するリスクを低減するために重要な対策

<BSE発症牛のプリオンの体内分布及びSRM部位>

出典：欧州食品安全機関「牛由来製品の残存BSEリスクに関する定量的評価レポート（2004年）」



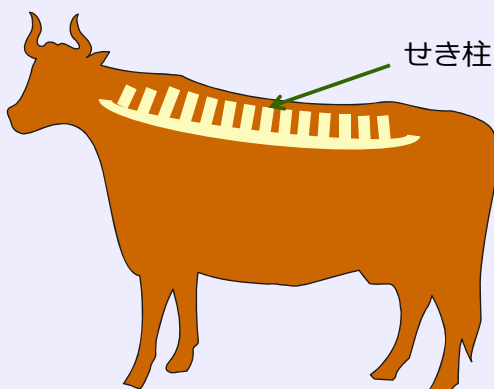
Ministry of Health, Labour and Welfare

33

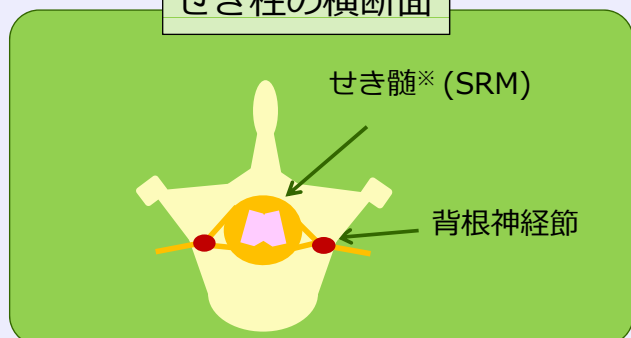
■ 牛せき柱に関する規制について

- せき柱（背骨）の、骨自体には、BSEプリオンは蓄積しない。
- 背根神経節**には、BSEプリオンが蓄積されることがわかっている。
- 背根神経節は、通常の処理では、せき柱の骨の部分と完全に分離できないため、背根神経節を含む、せき柱を規制している。

せき柱の部位



せき柱の横断面



※ せき髄はと畜場において処理



Ministry of Health, Labour and Welfare

34

■ 牛せき柱に関する規制の見直し内容の詳細

<見直し内容>

① せき柱の食品等への使用

安全性を確認した国で飼養された、30月齢以下の牛由来のせき柱は、食品等への使用が認められることとする。

- 30月齢以下：
 - ・ Tボーンステーキとしての提供が可能。
 - ・ エキス、骨油、ゼラチン等の原材料として使用が可能。
- 30月齢超：引き続き、食品等への使用は不可。

適切な分別管理が必要

② せき柱の範囲を変更

骨の突起部分の一部は、リスクにはならないことから、規制の対象外としている。

除去する際の現場の負担軽減のため、規制の対象外とする突起部分の範囲を拡大する

